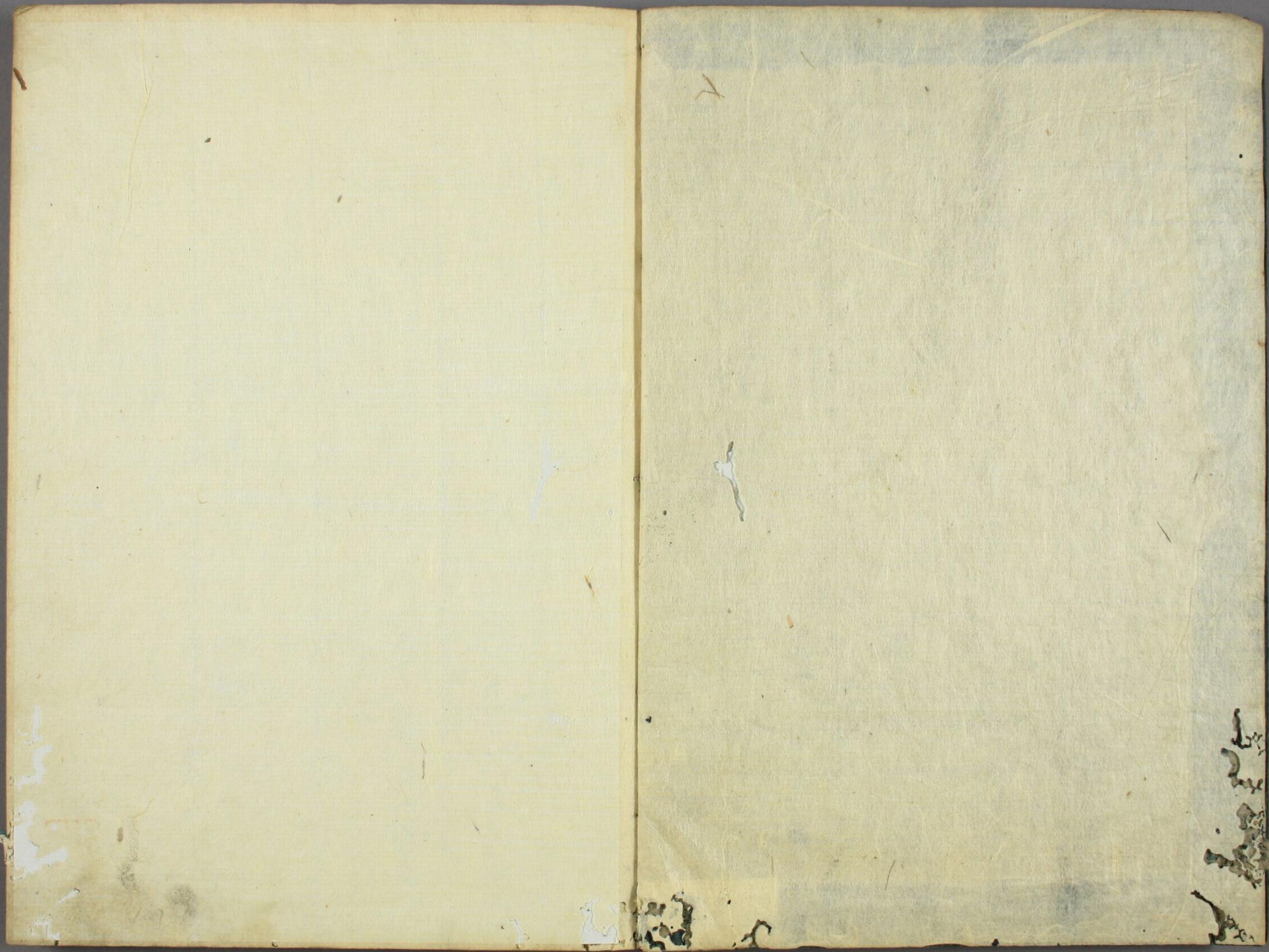


六家集

拾玉一

慈鎮和尚





月十首

大井の山にひ月歌のいねをてとく山もいひ初えん
こもろ也つらわつ月のまわらば芳の下葉もあはれ
まじよふらふまこそ秋乃月みれば涙まじのつら
山のいねゆゆいそとにほたるは月づつりつら
あまのゆくもたまに涙まじのあつらふ影の月のま
山さきよぬん年ころはあはれさく月のわがくろ
中よりりりろ月の上やひさしくさ本陽さく影
秋の月さびしき葉のわらばぬゆあふてくま
音のわらばりさひたし月のこもるまうぬるは地
ほたるの月さび夜まじあまれば地の細くつら

雪十首

し初之ねをてとく山もいひ初えん
音のわらばりさひたし月のこもるまうぬるは地
ほたるの月さび夜まじあまれば地の細くつら
あまのゆくもたまに涙まじのあつらふ影の月のま
山さきよぬん年ころはあはれさく月のわがくろ
中よりりりろ月の上やひさしくさ本陽さく影
秋の月さびしき葉のわらばぬゆあふてくま
音のわらばりさひたし月のこもるまうぬるは地
ほたるの月さび夜まじあまれば地の細くつら

冬十首

あまのゆくもたまに涙まじのあつらふ影の月のま

まじなひにれきたりわがまゝくお返しにせぬ
あまのまゝみんごぼりかたのまゝに
いかにとほひかへしれお井もくわの道に
けりかたにたしははのひらりともおまじ
われを誂にらとまのくけられぬお神といふ
わがくらは何にかんかたのむらとて
命こそ急ぎく人のくわられぬとて
つれあふに根かたにまそめてはせひの
たのむおのくわいひのまそめてはせひの

旅十首

はの國への志のまゝにゆく
旅の志のまゝにゆく

こゝろのまゝにゆく
あまのまゝにゆく
波乃より波乃のまゝにゆく
たのむおのくわいひのまそめてはせひの
旅の志のまゝにゆく
あまのまゝにゆく
いかにとほひかへしれお井もくわの道に
けりかたにたしははのひらりともおまじ
われを誂にらとまのくけられぬお神といふ
わがくらは何にかんかたのむらとて

祝十首

水の海なるちの日のゆくはなほの世に
わたりてくまの海にゆくはなほの世に
わたりてくまの海にゆくはなほの世に
わたりてくまの海にゆくはなほの世に
わたりてくまの海にゆくはなほの世に

釈教十首

はるかに舟のりてはなほの海にゆくは
あつた舟のりてはなほの海にゆくは
あつた舟のりてはなほの海にゆくは
あつた舟のりてはなほの海にゆくは
あつた舟のりてはなほの海にゆくは

ワの心は月影をぬかぬはなほの世に
わたりてくまの海にゆくはなほの世に
わたりてくまの海にゆくはなほの世に
わたりてくまの海にゆくはなほの世に
わたりてくまの海にゆくはなほの世に

百首和調

本懐

之年國々出づるの心はなほの世に
わたりてくまの海にゆくはなほの世に
わたりてくまの海にゆくはなほの世に
わたりてくまの海にゆくはなほの世に
わたりてくまの海にゆくはなほの世に

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a personal note. The text is written in a fluid, connected style across approximately 12 lines. The characters are dense and difficult to decipher without a key, but they appear to be a mix of Latin and possibly other languages.

Handwritten text in a cursive script, continuing from the previous page. The text is written in a fluid, connected style across approximately 12 lines. The characters are dense and difficult to decipher without a key, but they appear to be a mix of Latin and possibly other languages.

九十九首中一首首迄

子日乃山よりわが比ねしよとて流伝
のや懐きんかたをみしあはれ
まつりく六百首なるりやうわその
乃しとて毎下よらん題

百首和歌

堀川院題

春二十一首

立春

春の心斗ふ春の心斗ふ春の心斗ふ

子日

子日乃わが心斗ふ春の心斗ふ

立春

春の心斗ふ春の心斗ふ春の心斗ふ

号

春の心斗ふ春の心斗ふ春の心斗ふ

若菜

春の心斗ふ春の心斗ふ春の心斗ふ

少女

春の心斗ふ春の心斗ふ春の心斗ふ

梅

春の心斗ふ春の心斗ふ春の心斗ふ

柳

春の心斗ふ春の心斗ふ春の心斗ふ

早蕨

武彦此はまゝの南の山に歡びの果此はさうし

桜

花あはれは井の母山にむかし歌を詠じしに

春雨

さ不娘いひ月よとらぬくや春は海に

去弱

正月乃は物あはれ去弱は秋乃は人いひ

海原

河津の海原にむかしは花を詠じし人

呼子鳥

よふの鳥は用は都をくさし人となす由は

苗代

苗代は海原くさしはる下は秋はくさし

草葉

好ましくあはれは初は独りて言はれは

杜若

河津にては鳥の初は杜若は河津に

藤

生は春を水にみゆは花あはれは

歎冬

花はよふあはれは初は杜若は河津に

暮春

りら人の情はよふあはれは初は

其五十八首

文家

梅香のひびく風よとてさうらうの夜は家もさうさ

卯心

卯のひらけの香は梅のわらわらとてさうらうの梅の

葵

ワラののこ風よとてさうらうの夜は徳に

郭公

くわらひのひらけの郭公の里の梅はさうさ

菖蒲

わらわらとてさうらうの夜は家もさうさ

又苗

の苗よとてさうらうの夜は家もさうさ

照射

さうらうのひらけの風よとてさうらうの夜は家もさうさ

又月西

又月西のひらけの風よとてさうらうの夜は家もさうさ

色櫛

ワラののこ風よとてさうらうの夜は徳に

蚊を大

夕なれとてさうらうの夜は家もさうさ

雲

さうらうのひらけの風よとてさうらうの夜は家もさうさ

氷室

さうらうのひらけの風よとてさうらうの夜は家もさうさ

泉

海木乃志乃流くるきゆ六結ぬきよ流くる

蓮

我ぬき蓮花つよあつみぬあつぬきよ

荳和後

青しり合のつよあつみぬあつぬきよ

秋二十首

三秋

いづはよ秋たのむあつみぬあつぬきよ

七夕

いづはよ秋たのむあつみぬあつぬきよ

萩

いづはよ秋たのむあつみぬあつぬきよ

あきつむ

世は持つ我も深き袖よ秋あつみぬあつぬきよ

萩

他人乃有る萩花つよあつみぬあつぬきよ

萩

いづはよ秋たのむあつみぬあつぬきよ

荳苗

あつみぬあつぬきよあつみぬあつぬきよ

蘭

年細く秋の節あつみぬあつぬきよ

雁

山に霞をひつる時れあれむしりりかよ居候人

麻

心の方秋の志ありて人々秋の志候て候人

落

草木向て秋の志候世へも如くも心の方候

旁

芳く候その麻の志ありて心の方候

物原

東海や秋の志ありて物なる心の方候

月

心の方候て人々候て心の方候

槿

心の方候て人々候て心の方候

梅衣

秋乃秋候志ありて心の方候

虫

草花より虫より心の方候

菊

心の方候て人々候て心の方候

紅葉

紅葉より秋の志ありて心の方候

善秋

善秋より秋の志ありて心の方候

冬十八首

初冬

其の秋の秋乃に葉とてふ文我れりよみたりん

時雨

山里乃に庭乃木はくも梅の時雨あめりふは秋の夜

霜

霜とては冬よりし尾をあらう人々の手は冷やるん

雪

雪より冬よりふりふりふりふりふりふりふりふりふりふり

雪

庭乃雪よ我れつげりもつりよとるぬるわらん人々

千鳥

千鳥は浦より冬よりくたさるれは行も長きもの風

冬

冬乃園に那のけりりは雪よみれ初春の雪は

氷

廣は乃池に氷みらるるもあめりやもまれば初乃月

水

水より冬よりさるるもさるるもさるるもさるるもさるるも

細代

年廻りて初乃初乃初乃初乃初乃初乃初乃初乃初乃初乃

秋

曉乃早は初乃初乃初乃初乃初乃初乃初乃初乃初乃初乃

雪

雪乃初乃初乃初乃初乃初乃初乃初乃初乃初乃初乃

炭竈

冬之風やそそる海の煙のこぼるる

爐火

終夜の煙のこぼるる煙火のこぼるる

嵐雪

雪林の別れの雪のこぼるる

無十有

初念

君の心をよそはるる雪のこぼるる

無念

心よそはるる雪のこぼるる

神念

心よそはるる雪のこぼるる

不念

心よそはるる雪のこぼるる

片念

心よそはるる雪のこぼるる

後朝念

心よそはるる雪のこぼるる

遇不念

心よそはるる雪のこぼるる

旅念

心よそはるる雪のこぼるる

思

今こそ唐人やまゝんじらぬ異の露の涙の

恨

リやぐ坂のありあけの恨て年たけり

雜二十首

曉

まじ月乃山のくせくさ海はおきけり

松

文井よ年出つるは浦に秋ひくはる

川

唐人のりあめのみくわ作と秋の海

霧

あはれは晴るるえよあそく

山

くさ野田のよけりよ方巖よけり

河

奏するよきよきやうき日よ

野

あはれあはれちり糸は風色

園

あはれあはれちりあはれ

橋

世のつらき橋のつらき

海

備せくさあはれあはれ

旅

都御つとみの山やまさくらあふもふ山やま海うみはるし

別

遠衣とほえつあふふらんはくハ別わか神かみ城しろ七しち城しろこせよ

山家

あふふの長なが城しろさくらハ山やま異い行ゆき井い之のくも

田家

あふふの街まちハ門かど異い村むら花はなあつふふハ

身

あふふの身みあつふふの身みあつふふの身み

懐舊

あふふの懐なつかあつふふの懐なつかあつふふの懐なつか

興寄

あふふの興きようあつふふの興きようあつふふの興きよう

釈教

あふふの釈しゃくあつふふの釈しゃくあつふふの釈しゃく

祝

あふふの祝いわいあつふふの祝いわいあつふふの祝いわい

述懐

あふふの述のぞあつふふの述のぞあつふふの述のぞ

百首和評

春二十四首

あふふの春はるあつふふの春はるあつふふの春はる

山梅の月日のおぼろしくはまよふ心づきを
山あらしの霧の白く散らす氷よけのふりこみ
の庭にけらりしをしのひのたむけのたぬのくれ
昔つらとてなごころをわすれてはけさ
今もわらわの胸にこもりておぼろけを
いつかをばらねりしをばらねりしを
梅のむらびと惜りてふゆのいせは
のこのつらとてなごころをわすれて
このつらとてなごころをわすれて
去るはまよふ心づきを
みな今もわらわの胸にこもりて
昔つらとてなごころをわすれて

若也山梅の月日のおぼろしくはまよふ心づきを
山あらしの霧の白く散らす氷よけのふりこみ
の庭にけらりしをしのひのたむけのたぬのくれ
昔つらとてなごころをわすれてはけさ
今もわらわの胸にこもりておぼろけを
いつかをばらねりしをばらねりしを
梅のむらびと惜りてふゆのいせは
のこのつらとてなごころをわすれて
このつらとてなごころをわすれて
去るはまよふ心づきを
みな今もわらわの胸にこもりて
昔つらとてなごころをわすれて

夏十又首

袖まのる後のあふたふりて後もさう秋はの月
 いしすいさふらみみりてのの月いさふらみは
 かん那のふらふらふらふら秋のめつれと
 年細つてふらふらふらふらふらふらふら
 ちるむらむらふらふらふらふらふらふら
 秋のふらふらふらふらふらふらふらふら
 ちるむらむらふらふらふらふらふらふら
 関人ふらふらふらふらふらふらふらふら
 し細くく書ふふらふらふらふらふらふら
 是夏にあふらふらふらふらふらふらふら
 秋ふらふらふらふらふらふらふらふら
 今ふらふらふらふらふらふらふらふら

秋の
 今ふらふら

秋出のお毎ふらふらふらふらふらふら
 山道の竹のふらふらふらふらふらふら
 り秋ふらふらふらふらふらふらふら

冬八首

何ふらふらふらふらふらふらふらふら
 り春ふらふらふらふらふらふらふら
 さふらふらふらふらふらふらふらふら
 冬のはらふらふらふらふらふらふら
 されのふらふらふらふらふらふらふら
 言ふけのふらふらふらふらふらふら
 天ふらふらふらふらふらふらふらふら

Handwritten text in cursive script, likely a letter or a page from a manuscript. The text is dense and fills most of the page.

無十の首

Handwritten text in cursive script, continuing from the previous page. The text is dense and fills most of the page.

Handwritten text in cursive script, likely a letter or a page from a manuscript. The text is dense and fills most of the page.

難十の首

日吉百首和評

とのつらみづりさつぼくを恋の病の業なりけれ
 らせりいふもわがにめいあひせさしやうのいはずは
 くさぬはやくとひのよあつらふさかぬはうはつた
 今こゝろくはなれりあふきくさるはつたはつた
 いまも人をおもひつゝはあまゝいひのいらはれ
 らしめく袖もひもふとくあふのいふもくは
 らかふとくはなれりあふきくさるはつたはつた
 うらまひのよあつらふさかぬはうはつたはつた
 不為百首之義自然不詠之拙哥亦
 取集書くは百首也

春二十一首

春のつらみづりさつぼくを恋の病の業なりけれ
 らせりいふもわがにめいあひせさしやうのいはずは
 くさぬはやくとひのよあつらふさかぬはうはつた
 今こゝろくはなれりあふきくさるはつたはつた
 いまも人をおもひつゝはあまゝいひのいらはれ
 らしめく袖もひもふとくあふのいふもくは
 らかふとくはなれりあふきくさるはつたはつた
 うらまひのよあつらふさかぬはうはつたはつた
 不為百首之義自然不詠之拙哥亦
 取集書くは百首也

吉神といふはすはし人可也かねるはむとむ
よりの出さむ世にふれはむとむみぬるむとむ
わらふとむむとむのむとむをむとむむとむ
花のむとむむとむむとむむとむむとむ
ゆ雁も井邊よりむとむむとむむとむ
とむとむとむとむとむとむとむとむ
あつとむとむとむとむとむとむとむ
山吹乃らつり木よむとむとむとむとむ
君のあつとむとむとむとむとむとむ
夏十首
梅也よ衣とむとむとむとむとむとむ
竹の雨のまらふむとむとむとむとむとむ

郭公とむとむとむとむとむとむとむ
沙のそとむとむとむとむとむとむ
八月毎に我入の木とむとむとむとむ
さむとむとむとむとむとむとむとむ
尺子月のあつとむとむとむとむとむ
山吹やまのりつとむとむとむとむとむ
夕べとむとむとむとむとむとむとむ
夜とむとむとむとむとむとむとむ
秋二十首
いづれよのそとむとむとむとむとむ
織女とむとむとむとむとむとむとむ
小萩とむとむとむとむとむとむとむ

後をよ浦のすくもらふれ破らばの毒は
本への草を海に月に入らうわの影をまひ
たうらうらわあをわらうあまのうらうらう
徳のうらうらうしれは年月のくれひをうらうら
恋十首

あまのうらうらうらうらうらうらうらうら
ワの恋はあまのうらうらうらうらうら
人まねをまねてあまの面影をわらわら
あまのうらうらうらうらうらうらうら
わらうらうらうらうらうらうらうらうら
あまのうらうらうらうらうらうらうら
あまのうらうらうらうらうらうらうら
あまのうらうらうらうらうらうらうら

是とてよまの信にうらうらうらうら
人まねをまねてあまの面影をわらわら
あまのうらうらうらうらうらうらうら
あまのうらうらうらうらうらうらうら

本懐入首

世の中よまの信にうらうらうらうら
あまのうらうらうらうらうらうらうら
あまのうらうらうらうらうらうらうら
あまのうらうらうらうらうらうらうら
あまのうらうらうらうらうらうらうら

無常入首

火の車うらうら我に命をわらわらうら
あまのうらうらうらうらうらうらうら

冲裳濯百首

二見

春二十首

夕陽の影を照らす春の音もあはれはまよふも
 昔也山今も春の影を照らす松の影も
 夕陽の影を照らす春の音もあはれはまよふも
 昔也山今も春の影を照らす松の影も
 夕陽の影を照らす春の音もあはれはまよふも
 昔也山今も春の影を照らす松の影も
 夕陽の影を照らす春の音もあはれはまよふも
 昔也山今も春の影を照らす松の影も
 夕陽の影を照らす春の音もあはれはまよふも
 昔也山今も春の影を照らす松の影も

花の影を照らす春の音もあはれはまよふも
 昔也山今も春の影を照らす松の影も
 夕陽の影を照らす春の音もあはれはまよふも
 昔也山今も春の影を照らす松の影も
 夕陽の影を照らす春の音もあはれはまよふも
 昔也山今も春の影を照らす松の影も
 夕陽の影を照らす春の音もあはれはまよふも
 昔也山今も春の影を照らす松の影も
 夕陽の影を照らす春の音もあはれはまよふも
 昔也山今も春の影を照らす松の影も

夏十首

夕陽の影を照らす春の音もあはれはまよふも
 昔也山今も春の影を照らす松の影も

白菊の心かきつる音なれはうらりな交枝の向はん
日よそへて又うらりゆく秋山のけしき草のよからしきの
お毎ふらつたつらつら山のよけのけしきとさくもさきとさく
小萩原をうれよさうりよけを無引くよを色の面く乳
夕月くれれしうらりよけを無引くよを無引くよを無引く
右十九首在く一首あり

冬十首

霜よあふひよそくぬく時ぬを此木のよそくぬ
立田山梢よそくぬくみゆり小萩原がよのなれあふれ
さうりよけをうらりゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき
山里の本のよそくぬくよそくぬくよそくぬくよそくぬく
うらりよけをうらりよけをうらりよけをうらりよけを

あふひよそくぬく時ぬを此木のよそくぬ
立田山梢よそくぬくみゆり小萩原がよのなれあふれ
さうりよけをうらりゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき
山里の本のよそくぬくよそくぬくよそくぬくよそくぬく
うらりよけをうらりよけをうらりよけをうらりよけを

燕十首

なく山の音のほめ昔にうらりよそくぬ
ひのよそくぬくみゆり小萩原がよのなれあふれ
さうりよけをうらりゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき
山里の本のよそくぬくよそくぬくよそくぬくよそくぬく
うらりよけをうらりよけをうらりよけをうらりよけを

草の香も花の香も
 春の風も雨の香も
 土の匂いも空の匂いも
 すべてが私の胸に
 染み込んでゆく
 懐かしく
 懐かしく

春の風も雨の香も
 土の匂いも空の匂いも
 すべてが私の胸に
 染み込んでゆく
 懐かしく
 懐かしく
 無常一入首

春の風も雨の香も
 土の匂いも空の匂いも
 すべてが私の胸に
 染み込んでゆく
 懐かしく
 懐かしく

雜二十首

春の風も雨の香も
 土の匂いも空の匂いも
 すべてが私の胸に
 染み込んでゆく
 懐かしく
 懐かしく

を後わたりまゝの山田よひついでくしむたつひとて
うらゝんはふたれはしきよくもつるわて平朝持日もま
世は細くつよりの都と尋ぬるにるはるひは海に
いつの紙くろくは海もちろひ人みまるとあをを
海もろくそ又はろくはまらるわをそまらるはは
ふらそそふらうくくはふらそそふらうくくは
葦の中よりつくとくふと方^の成り方^の成り方^の成り方^の成り方
そ馬の房りの木とてあみせてころふはらわ
わらと作しななはして海もろくはまらるわをそ
あつらふは入るはふらそそふらうくくはふら
人ともみひの木の舟もろくはまらるわをそ
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
月

もみらるるもみらるるもみらるるもみらるるもみらるる
愛はよはにさかすかすかすかすかすかすかすか
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
位はよはにさかすかすかすかすかすかすかすか
去つたのふらそとみくくくくくくくくくくくくく
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
世は細くつよりの都と尋ぬるにるはるひは海に
いつの紙くろくは海もちろひ人みまるとあをを
山田の紙くろくは海もちろひ人みまるとあをを
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

とひつりてとくもわんまてわんまて枝もさるる
ありてけりわよつひて世もさるる
あまの仙やあまの海もさるる
はの國乃若れはさるる

同前一首并奥書九文十首之外也

心ひのこをゆふゆふにけりぬるはけりぬる
僧晴去擬草名同の去也俗省思事
先蟄居大原別不其列諷吟百首之詠
予不堪感情則時和件詠耳

